



講師 尾方僚氏

「第21回WINGの会」 女子学生応援セミナー に参加して



平井千香子（法学部4年）

昨年12月19日、第21回WINGの会女子学生応援セミナーが開催されました。土曜日だったにもかかわらず、3号館の教室はあっという間に女子学生でにぎわい、相席をお願いすることもあったほどの大盛況ぶりでした。

開会式の後、^{さっそく}颯爽と教壇に上がった女性は講師の尾方僚先生でした。尾方先生は多くの企業や大学で講演会を行っているコンサルタントのエキスパートです。

講演は、企業が就活生に求めていることを明確にし、私たち就活生が夢をかなえられる職に就くための具体的な戦略を与えてくれる内容でした。

最も印象的だったのは、就職とはハンティングであり、狩りに行かなければ狩ることができず獲物ごとに装備は変えなければならない、ということでした。

自分がなにをできるかではなく、その会社でどう活躍するのかを具体的に示すことと、そのためには10年後の生活を思い描き自分にとって最も譲れないものを明確にすることが



必要だと学びました。

講演会の次は、内定者4人によるパネルディスカッションです。

内定先は重工メーカー、金融、広告業界などで、一度にあらゆる業界の対策方法を聞くことができました。

企業研究やOB・OG訪問についてといった初歩的でいまさら聞くことが^{はばか}憚られるような質問にも答え

ていただき、今までの自分のやり方を見直す機会になりました。

女子学生なら誰もが気になる身だしなみについての質問もありました。

髪形や化粧を、志望する業界によって変えることは必要ない、装う準備をすることはもちろん大切ですが、それ以前に姿勢や座り方を美しく意識すべきだという解答に納得しました。

化粧や髪形はすぐに直せますが姿勢や態度は簡単に変えられるものではありません。前髪の長さの決まりや就活用メイクといった^{うわさ}噂より、自分自身が持つ清潔感の向上を目指そうと思いました。

このようなリアルで参考になるアドバイスは就活を終えたばかりの4年生だからこそできることだと感じました。

就活のスケジュールが変更になったことや、インターンシップやOB・

OG訪問は行くべきだなどといった情報は耳に入ってきますが、結局、いま何をすべきなのかわからず漠然と不安を抱えている学生がほとんどで、私もそのうちの一人でした。

この講演会で、就職がゴールなのではなく、もっと先の未来の自分を想像して、なりたい自分になれる企業を見つけることが就活だと学びま

した。

未来が漠然としていると就活の辛い時期に支えになるものがないように思えますが、憧れの生活を想像することで就活を乗り越えられます。

誰かと比較して不安になったりせずに、自分を信じて頑張ってください！ という先輩の応援を励みに、積極的に理想の自分を追求していこうと思います。



女性の学生で満員のセミナー会場



女性白門会

女性白門会は1968年に結成された、さまざまな分野で活躍する女性卒業生の会。

1995年から女子学生のキャリア支援の会を立ち上げ、1999年に「WINGの会」と命名、今回で21回を迎えた。

尾方僚氏

株式会社インターンシップ代表取締役、リクルーティングコンサルタント、日本女子大非常勤講師。

この日の式次第

- ▽女性白門会会長挨拶
- ▽講演・テーマ「これから始まる就活に今、やるべきこと教えます～女子学生の就活、ここがポイント～」講師・尾方僚氏
- ▽内定女子学生による就活の実際～後輩へのアドバイス～
- ▽本学女子学生の就職状況とキャリアセンターの利用のススメ

就職活動ルールの変遷・最近事例

決定時期	就活解禁	選考活動解禁	入社
2011年	3年生の12月	4年生の4月	2013年4月
2013年	3年生の3月	4年生の8月	2016年4月
2015年	同上	4年生の6月	2017年4月

言葉や国語について考えるこの欄は、文化庁の「国語に関する世論調査」などを参考にしている。



大学生になると、よく判断を求められる。

いいか、悪いかと問われたとき、「微妙」と答える人が多くなった。

平成26年の国語に関する世論調査によると、そのように使うことがあると答えた人は66.2%で、前回調査(同16年)の57.8%から

第20回

そうだったの!?

微妙

増えている。

年代別で見ると、調査対象の16歳から30代までが90%超の圧倒的な“支持”層。60代でも53%と5割を超え、70代で42.4%と低下する。

一方、使わないとの返答は33.4%。前回は41.8%だった。

新明解国語辞典は「微妙」を細かい所に美しさ・問題点・重要な意味などがあって、単純な論評を許さない様子と説明し、「微妙な食い違い」「心理が微妙に揺れる」などのように使うとしている。

最近多用される言い方は、責任を回避する表現との指摘がある。ストレス社会が生んだ“新語”、“新解釈”なのだろうか。